

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 法学 研究科 法学政治学 専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	法学研究科、法学政治学、後期4年	大平 道広	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	法学部教授	濱野 亮	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題名			
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2011 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、ホッブズの思想から国際平和の理論を構築すること、またそうした国際平和の理論が、現代世界において重要な意味を持つことを論証することを主な目的としている。

従来ホッブズの思想は、国際理論とは無縁のもの、あるいは国際戦争の理論を代表するものとして解される傾向が強かった。本研究は、そうした従来のホッブズ研究に対するアンチテーゼを示そうとするものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[国家間の平和] [国家間の法] [自然法]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度は大学院紀要を活用し、文献研究(書評)を作成した。文献研究において扱った資料は、二〇〇九年にマクミランから出版されたチャールズ・コヴェルの “*The Law of Nations in Political Thought: A Critical Survey from Vitoria to Hegel*” である。

タイトルから見て取れるように、本書はビトリアからヘーゲルまでの思想を国際法学の観点から分析を行ったものである。

私が本年度の研究において上記の文献を扱った理由は、その文献の中で、ホッブズの思想について詳細な論述がなされていたからである。私は前期課程在籍時以来、ホッブズの思想について国際平和の視点から分析を行ってきたのであるが(通説では彼の思想は国際戦争の視点から分析がなされてきた)、本文献では彼のそれは、これまで私が分析してきた視点と全く同様のものから論述がなされていた。

本文献は、国際関係における平和論や国内における民主主義論は、ビトリアにはじまりベンサム及びカント(部分的にはヘーゲル)において完成するのであり、従ってホッブズ、ロック、グロチウス、プーフENDORFらの思想もこうした一連の流れの中で捉えられると主張するものである。

以上の主張は、これまでに私が行った研究の正当性を裏付けるものであり、従って私は本書を本年度の文献研究で扱うに至った。

文献研究の構成について若干触れておくと、まず私は前半部でコヴェルの文献の内容を要約した。そして次に彼の文献の内容について、評価及び批判を行った。評価としては先の記述からも見て取れるように、コヴェルが彼自身のホッブズ解釈において、従来の解釈には見られなかった論理を展開していることを私は挙げた。批判としては、これまで国際法学・政治学の観点から比較的多くの研究がなされてきたアキナス、ベンサム、及びカントの思想について、コヴェルが全く独自の解釈を展開しておらず、従って本書がやや国際関係思想史の教科書に終始する傾向があることを私は挙げた。

全体として、本書は私自身のこれまでの研究内容により厚みを持たせる、また今後の研究の方向性を探る素材となった。

今後の研究において、私は本文献研究の成果を大いに活かして行きたい。

研究成果の概要 つづき

※ この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 大平 道広、「チャールズ・コヴェル、『政治思想史における国際法—ビトリアからヘーゲルまで—』」、立教大学大学院 法学研究、第43号、2012、p. 37-43。
〈文献研究〉

④ 学会発表、「トマス・ホッブズの国際関係思想—国際平和の視点から—」、2012、総合人間学会、2012、5月27日、日本大学文理キャンパス。〈レフェリー通過〉(但し4月から海外で就業するため放棄)